

書 燈



(右) 平成 29 年度読書週間行事
「おきしお夢はこぶ号と行く神戸・歴史の旅」

(左) 平成 29 年度読書週間行事
小野田金司氏講演会「観光のプロになる方法」

子供の「読む」を育てる

阪 本 和 子

平成 13 年の子どもの読書活動の推進に関する法律の制定に伴い、各自治体では推進計画を策定し、子供の読書活動推進に取り組んでいる。「読書の街」を宣言する自治体もある。平成 26 年には学校図書館活性化のために学校図書館法が改正され、学校司書の配置が各自治体の努力義務となった。さらに、平成 29 年に公示された新たな学習指導要領では、言語能力の確実な育成のため、学習の基盤としての各教科等における言語活動の充実が重視されている。子供の「読む」を育てようと、国をあげて取り組んでいるのだ。

一方で、「本を読むということは、子供にとってたいへんしんどい作業なのだ」とある人が言っていた。単なる記号にすぎない文字ひとつひとつが集まり、意味のある単語へ、単語が連なって一つの文へ、そして、いくつかの文がまとまって文章となり、書き手の思想や感情を表すことができる。ひらがなを覚えるところから文章を読みこなすまでには、たいへんに大きな成長の幅があるのだと。自分がどのようにして「読む」ことを覚えたかなど全く記憶にないが、発達段階に応じ周囲の大人のサポートがあったのだろう。

子供の「読む」は家庭では保護者に、学校園では保育士や教師に、また読み聞かせ等のボランティアにと、子供に関わる多くの人の手によって育てられ

る。公立図書館もそのひとつだ。図書館では乳幼児から中高生まで、幅広い対象に対して様々なサービスを行っている。学校園や児童館など他の施設に比べて圧倒的な数の蔵書と、子供の本を知り、読み聞かせやブックトークなど児童サービスの技術をもつ職員の存在が武器だ。だが、図書館にやって来る子供はたくさんいても、市内に住む子供の一部にすぎず、その一人ひとりとの関係性はそれほど濃くはない。来館者に対してサービスするだけではなく、子供やその保護者と日ごろから密に関わっている施設や他部署と連携することも重要だ。子供に関わる周囲の大人にはたらきかけることにより、より効果的に子供の「読む」を育てることができるのではないか。子育てや教育の現場では今何が必要とされているかを知ることにより、図書館の強みを活かしたサービスを行うことができるのではないか。

子どもの読書活動の推進に関する法律には、「子どもの読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものである」と謳われている。子供の「読む」を育てることが、知識や学力のみならず、未来を担う子供そのものを育てるのだということを肝に銘じ、子供の読書活動の推進に取り組んでいきたい。

(利用サービス課担当係長)

和漢古書の組織化における現状と課題

高橋 一郎

1. はじめに

一般的に、明治維新（1868年）以前に、日本人によって書写、または刊行された日本語の資料を和古書、あるいは古典籍という。また、辛亥革命（1911～1912年）以前に、中国人によって著された中国語の資料は、漢籍（中国では、古籍）と呼ばれる。この両者には共通点が多く、図書館においては、和漢古書と総称されることも多い。

和漢古書は、形態や成立過程が近代以降の出版物と大きく異なる。そのため、図書館では例外的な取扱いの対象とされている。また、組織化の歴史が古く、所蔵機関毎に独自の目録法が確立されてきた。

そこで、国立情報学研究所所管の総合目録データベース「NACSIS-CAT」（以下、NC）では、平成15年に、和漢古書の取扱いに関する規定が設けられた。また、平成17年には、「日本目録規則」（以下、NCR）に和漢古書関連の項目が追加された。しかし、国内における目録法の平準化には、至っていない。

本稿では、こうした状況を踏まえ、過日参加した「日本古典籍講習会」（国立国会図書館（以下、NDL）、国文学研究資料館（以下、国文研）共催）及び「漢籍整理長期研修」（東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター主催）の内容に基づき、和漢古書の組織化について、その特殊性、総合目録の事例及び当館の現状を概観し、今後の課題を考察する。

2. 和漢古書の特殊性

和漢古書の書誌作成には、特殊な基準が多い。

まず、資料の同定が困難であると共に、蔵書印等による個別資料の来歴も重要視されるため、記述対象毎に書誌を作成することが基本とされている。

また、多くが和装本（漢籍では、線装本という）であり、改装や合綴が容易なため、タイトルの情報源は、表紙や標題紙ではなく、巻頭が原則である。

さらに、複数冊から構成される資料が多いことから、書誌の作成単位は、物理単位（1冊毎）より、書誌単位（1タイトル毎）のほうが合理的である。そのため、平成32年に書誌データの構造を書誌単位から物理単位に移行する予定のNCにおいても、和漢古書については、例外とされている。

対象資料から得られる情報だけでは、十分な書誌情報を記述できない点も、和漢古書の特徴である。特に、和漢古書には写本が多く、他の写本と比較し、原本との異同を検証しなければ、書写の系統や年代等、資料の成立に関する情報を得ることができない。

また、刊本の場合も、同じ版木による後印本（後摺り）や後修本（補刻）が存在するため、刊記だけでなく、版の劣化や補修の有無を確認する必要がある。さらに、模刻本や覆刻本（被せ彫りによる再版）では、紙質等が情報源となる場合もある。

加えて、書誌に記述する文字種の問題がある。和古書には、異体字や変体仮名が使用されている例が多い。また漢籍の書誌は、旧字（繁体字）で記述することが慣例である。しかし、システム上の制約もあり、全ての文字種を記述できるとは限らない。

3. 国内における総合目録の事例

(1) 日本古典籍総合目録データベース

和古書の全国的な総合目録としては、国文研の運営する「日本古典籍総合目録データベース」（以下、古典籍DB）がある。古典籍DBは、『国書総目録』（岩波書店刊）を引き継ぎ、大学や研究機関、各種図書館等の所蔵する資料（マイクロ及びデジタル資料を含む）の書誌レコード約60万件を収録する。

特筆すべき点は、情報量の多さである。例えば、複数の書肆による共同出版の場合、一般的には、1者の採録に止まることが多いが、古典籍DBでは、全ての書肆が出版事項として採録される。

その他の特徴としては、著作の典拠が挙げられる。これは、『国書総目録』の項目を単位とするもので、一般的な統一書名典拠より、『書誌レコードの機能要件』（FRBR）に示される著作（work）の概念に近い。

さらに、国文研では「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」として、古典籍DBとリンクしたデジタル画像の公開も進められている。

(2) 全国漢籍データベース

日本国内における漢籍の総合目録が「全国漢籍データベース」（以下、全国漢籍DB）である。京都大学人文科学研究所（以下、人文研）附属東アジア人文情報学研究センターにより運営され、各種の図書館が所蔵する漢籍の書誌約9万件が登録される。

漢籍の組織化は歴史が古く、紀元前1世紀（前漢代）にまで遡る。多くの目録法は、その伝統に沿い、ISBD区切り記号などを用いず、中国語の文法に従って文字のみで記述される。そこで、全国漢籍DBでは、伝統的な目録法に配慮しつつ、独自のタブ形式によって記述項目を区分し、機械可読性を確保している。

書誌データの構造は、書誌単位を基本としており、叢書に対応する書誌の作成も可能である。また、一部機関の所蔵する資料の巻頭画像約15,000件が登録されるほか、人文研の全文画像データベース「東方学デジタル図書館」にもリンクしている。

4. 神戸市立中央図書館の現状

当館では、約 300 タイトルの和古書を所蔵し、その中には、版や刷の異なる『攝津名所圖會』や、「有馬節」「兵庫口説」といった近世の流行歌謡を今に伝える刊本など、希少な郷土資料も含まれる。書誌は、NC に準拠した独自規則によって、書誌単位の情報と物理単位の情報が併記される。また、他の所蔵資料と同様、蔵書検索システム（以下、OPAC）による検索も可能である。さらに、手書きの絵図や刊本の挿絵の一部をデジタル化し、「貴重資料デジタルアーカイブズ」として WEB 上に公開している。

漢籍については、著名な中国文学研究者である吉川幸次郎氏の旧蔵書約 4,500 冊を特別コレクション「吉川文庫」として所蔵する。四部分類により配列した冊子目録を作成しており、その記述は、人文研の採録方法に則している。他の資料とは書誌の形式が異なり、OPAC には非対応だが、全国漢籍 DB に登録しているため、WEB 上での検索が可能である。

5. 今後の課題

国内には、現在も未整理の和漢古書が多く存在する。こうした資料の組織化を効率的に進めるには、他機関の所蔵する和漢古書と比較するための環境を整えることが有効である。

そのためには、書誌情報をより詳細に記述することが必要である。この点では、前述の古典籍 DB の例だけでなく、条文案を公開中の NCR2018 年版(仮称)においても、記述項目の階層化や、責任表示の全件採録など、より豊富な情報を記述する方向性が示されている。特に和漢古書の場合は、版式（版面の大きさや形式）や印記等の採録、さらには異形タイトル等に対応した典拠データの作成が望まれる。

また、和漢古書の場合、資料の保存を重視し、館外利用が制限される例が多いため、デジタル画像の公開も有益である。ただし、少なくとも巻頭、できれば全文の画像が公開される必要がある。この点については、既に多くの機関が所蔵資料の画像公開を進めており、前述の国文研や人文研のほか、NDL においても、所蔵する和漢古書のうち約 9 万点が「国立国会図書館デジタルコレクション」に収録され、うち約 7 万点が WEB 上に公開されている。

近年では、蔵書印データベースが公開され、くずし字解読アプリケーション等も普及している。この先、豊富な書誌情報と画像の公開が進めば、それらを機械的に比較し、資料間の関連を自動的に解析するシステムが登場する日も、そう遠くないだろう。

(資料係)

神戸開港 150 年記念関連行事

大黒 紀子

慶応 3 (1868) 年 1 月 1 日の神戸開港から、今年で 150 年。神戸市では、神戸の原点である神戸港を振り返り、さらなる発展につなげるため、平成 28 年 4 月 1 日から 29 年 12 月 31 日までを会期として「神戸開港 150 年記念事業」を行っている。当館でもこの事業に参加すべく、様々な展示を行った。

「貴重資料デジタルアーカイブズ」の高精度画像を活用した展示は、特に人気があり、写真撮影をされる方や展示物の前で友人と思い出を語り合う年配の方々の姿も見受けられた。

これからも、所蔵資料を活用し、他部署との連携も図りながら、神戸の魅力を発信できるイベントを企画していきたい。

※展示一覧

1 階ロビー展示

期間	タイトル	連携部署等
H28.7/12~7/24	素敵なお船旅へ	みなと総局振興課
H28.12/1~1/9	貴重資料デジタルアーカイブズでみる「神戸開港」	
H28.12/1~12/28	「神戸開港 150 年」パネル展示	広報課、神戸アーカイブ写真館
H29.2/7~2/28	神戸港から客船で	みなと総局振興課
H29.4/18~5/7	貴重資料デジタルアーカイブズで見る神戸外国人居留地	市指定有形文化財指定記念

1 階常設展示

期間	タイトル
H28.5~8	開港はじめ物語
H28.9~11	みなとの祭
H28.12~H29.2	画家が描いた神戸の港
H29.3~5	食の文明開化—新しい食との出会い

2 階（神戸ふるさと文庫）常設展示

期間	タイトル
H28.6~9	港ひらく—開港当初の神戸— 慶応 3 年~明治 20 年頃
H28.10~H29.1	神戸開港 120 年祭
H29.2~5	写真・絵画でたどる神戸港の変遷
H29.6~9	居留地計画図—J.W.ハートの地図
H29.10~H30.1	開港 150 年の出版物
H30.2~5	神戸港 航路と船

(調査相談係長)

一神戸深江生活文化史料館での図書館サービスコーナーの開設について一

東灘区深江地区にある神戸深江生活文化史料館に、予約図書を受取りと、本の返却を受付けるサービスコーナーを開設した。行政施設の空白地域であり、図書館からも離れている深江地区において、住民の利便性を向上させたいという市側の思いと、施設利用の活性化を目指していた史料館側の思いが一致して、開設に至った。毎週土曜日と日曜日の12時半から16時半の間、サービスを行うこととした。

8月5日(土)から運営を開始し、最初は利用も少なかったが、徐々に住民に定着しつつあり、「近くにできてよかった」というお声も頂戴している。

(総務課担当係長・村井)

一二期指定管理者候補者の決定一

平成30年3月に指定管理期間の満了を迎える神戸市立須磨図書館と三宮図書館の候補者が選定された。特に、三宮図書館については、三宮再整備基本構想に関わるため、平成30年度から31年度(2年間)の非公募による選定となった。両館ともに「共同事業体：神戸新聞・TRCグループ」が引き続き候補者に選定され、今後、市会の審議・議決を経て、指定される。

(総務係長・渋谷)

一夏休み期間中の行事一

中央図書館では、エコ工作「海の生き物おりがみでうちわ」のほか、「こうべママのこわ〜いおはなし会」、「英語あそびの会」、「県立こどもの館出張おはなし会」など、行事を多数開催した。こうべ子ども文庫連絡会による恒例の「夏休み特別おはなし会」は、神戸市内で活動するおはなしのグループが集まり、ストーリーテリング、絵本の読み聞かせ、パネルシアターなど、乳幼児から小学校高学年までが集まり、おはなしをたっぷり楽しむ一日となった。

須磨区在住の人気絵本作家、山本孝氏と青山友美氏による創作ユニット「よつばや」の原画展が、須磨区民センター内のミニギャラリーで開催された。須磨図書館でも特別展示コーナーを設け、2か月間に渡って関連展示を行った。作家ご本人からの寄贈絵本、主人公の立て看板や原画が飾られたコーナーでは、多くの来館者が熱心に鑑賞していた。期間中は、図書館からギャラリーへと足を運ぶ人だけでなく、ギャラリーを堪能した後に図書館へ来館する人もおり、図書館以外の区民センター利用者にも絵本の多様な楽しみ方をアピール出来た実りある展示になった。

新長田図書館では、「親子新聞教室」を初めて開催した。他館でも好評の、持参した写真を使って親子

でオリジナルの新聞を作るイベントである。写真の配置やタイトルに悩みながらも協力して自分だけの新聞を作り上げた参加者は、出来上がった新聞と特別に発行された号外を手にも満足そうな表情であった。

(市民サービス係・波多野、企画情報係・布川)

一研修「子供の本を選ぶ、見せる」一

9月14日、子供サービス委員会自主研修として、明定義人氏(京都橘大学文学部特任教授)をお迎えしご講演いただいた。著書『<本の世界>の見せ方』(日本図書館協会)に基づき、児童書の選書や分類・配架のポイント、選書のスキルアップに繋がる日頃の心構え等について伺った。研修後には、講師の元で談笑する参加者の姿も見受けられた。参加20人。

(市民サービス係・三木)

一中央図書館職員研修「基礎自治体の図書館における司書のポテンシャル」一

10月19日、外部講師による研修が行われた。恒常的な繁忙感、閉塞感の中、どのようにモチベーションを高め、維持するか。職員はそれぞれ、市立図書館の一員として視野を広げ知見を高めることが大切である。市の状況を知り、行政を知り、市民と交流する。身近な行政の窓口として市民からの信頼を得る。まちづくりの中で図書館運営を考える。広く見渡す中に日々の業務はある。仕事を再定義するきっかけをいただけた。

(企画情報係・西山)

一講演会「観光のプロになる方法」一

11月3日、平成29年度中央図書館読書週間行事として、神戸山手大学副学長・観光文化学科教授の小野田金司氏をお迎えし、講演会を行った。ご講演では、これからの観光ビジネスに関するお話とともに、お勧め本の紹介やご親戚の小野田寛郎氏のエピソードなど、盛りだくさんの内容をお話いただいた。時折笑いも起こり、会は楽しい余韻を残しつつ終了した。講演後のアンケートでは、「観光の固定した考えが改まった」や「講師の体験のお話がとてもおもしろく、自分でも何かしたくなりました」などの感想をいただいた。参加61人。

(資料係長・棟安)

一手帳一

会議	7.6~7.7	指定都市図書館長会議
	7.13	近畿公共図書館協議会理事会・総会
	7.20	神戸市立図書館協議会
	9.12	決算特別委員会
	9.26	兵庫県立図書館協議会
	10.27	中央図書館職員安全衛生委員会
研修	9.5~9.8	新任図書館長研修
行事	7.31	ビブリオバトル「係生徒の集い」
その他	6.20~7.16	電子書籍トライアル